

# 早稲田大学中央図書館教林文庫蔵

## 『金龍寺縁起』における千観伝

——『今昔物語集』卷十五第十六話との比較を中心に——

附 教林文庫蔵『金龍寺縁起』翻刻

崔 鵬偉

### 一 はじめに

千観（九一八〜九八三）は平安時代中期の天台僧である。その伝記は、『日本往生極楽記』（以下『極楽記』）第十八話をはじめ、『今昔物語集』（以下『今昔』）卷十五第十六話・『扶桑略記』永観二年八月二十七日条・『雑談抄』第十五話・『発心集』卷一第四話・『古事談』卷三第三十八話・教林文庫本『三井往生伝』卷上第四話・『古今著聞集』第四十八話・『私聚百因縁集』卷九第十六話・『元亨釈書』卷四慧解三「金龍寺千観」・『寺門高僧記』・『園城寺伝記』五之六・『帝王編年記』冷泉院安和二年条・『寺門伝記補

録』巻十五・『三国伝記』巻一第二十一話・同巻五第十八・『日本大師先徳明匠記』「箕尾先徳」・『扶桑隱逸伝』巻中・『東国高僧伝』巻六・『本朝高僧伝』巻九淨慧二之六・『扶桑寄帰往生伝』巻上などの史資料にみられる。千観は、橘敏貞の子（『尊卑分脈』）として生まれ、運昭（照）・行誉らに師事し、顕密を兼学した（『雑談抄』『発心集』『三井往生伝』『寺門伝記補録』）。空也に触発されて箕面山観音院に通世し、『法華三宗相對釈文』『十大願』などを撰述したが、応和二年（九六二）早魃の際に、勅命に応じて請雨に成功した。後に金龍寺に移り、永観元年（九八三）に逝去（『発心集』『元亨釈書』『寺門高僧記』）。「八箇条起請」「極楽和讃」「十願発心記」など浄土信仰関連の著作が現存する。

一方、早稲田大学中央図書館教林文庫蔵『金龍寺縁起』<sup>4</sup>には、千観に関する様々な伝承が収められており、前記史資料にみられないものも含まれる。いわば千観伝の集大成というべきものである。教林文庫は、元天台宗観音正寺の一坊である教林坊（滋賀県蒲生郡安土町）旧蔵の、仏書とりわけ天台宗関係書をを中心とした典籍のコレクションである。『金龍寺縁起』は、教林文庫の中で量的にも、内容的にも重要な意味を持つ、鶏頭院本覚蔵伝来の一本であり、いまだに翻刻されていない。湯谷祐三氏によってその成立事情が初めて明らかにされたが、他書にみる千観伝との差異については、まだ追及する余地があると思われる。

例えば、現存最古の千観伝は、『極楽記』第十八話とされる。『今昔』巻十五第十六話は、『極楽記』に基づき構成されつつ、独自の記述もみられる。湯谷氏は「何らかの形で『今昔物語集』が『往生極楽記』以外から千観に関する情報を得ていた形跡がある」とする。しかし、果たして『今昔』は『極楽記』以外

の資料を参照したのだろうか。

小稿では、まず『金龍寺縁起』の構成を概観した上で、『極楽記』にみられない『今昔』の独自記述の由来を分析する。ついで、『今昔』所収話における千観の出生や出家などの記述に注目し、『金龍寺縁起』との比較を通して、『金龍寺縁起』内容の特異性を浮かび上がらせるとともに、その成立時期についても検討したい。最後に、『金龍寺縁起』の翻刻を附す。これによって、恵心僧都源信までの浄土思想を研究する上で重要な人物の一人である、千観の伝記資料の集大成、とりわけ他書にみられない千観の文筆資料などを活字で提供することができ、千観研究の一助とならう。

## 二 『金龍寺縁起』の構成

『金龍寺縁起』の唯一の伝本は、早稲田大学中央図書館教林文庫蔵の江戸時代元禄年間の写本であるが、室町時代の醍醐寺の雑事を抄録した『枝葉抄』や寛文四年（一六六四）出版の『扶桑隱逸伝』から、すでにその存在を知ることができる。<sup>(8)</sup> 『金龍寺縁起』の全文は小稿の末尾に附録として掲載したが、その構成は次の通りである。〔部分〕は『今昔』と内容が重なるもの。「\*」を附した部分は『金龍寺縁起』の独自記述。

上巻

1 千観の出生

2 千観の出家

3 千観の法脈

\* 4 千観の熊野詣で

5 義照院との合宿

6 空也と

の対面 7 世俗を捨てる 8 箕面寺観音院にて十種の大願を発す 9 箕面寺を出て安満寺に辿り着く \* 10 神龍が千観に帰敬

中巻

\* 1 金龍寺の再興 \* 2 懺法を修す \* 3 清水坂乞丐の救済 4 乞雨 5 朝廷の恩賞を辞退 \* 6 行誓律師から伝法灌頂 \* 7 源為憲と詩文の応酬 \* 8 十悪五逆謗法者救済の和歌 \* 9 山崎の橋下での占い \* 10 淀の渡での馬貸し

下巻

\* 1 四弘誓願の和歌 **2 八箇条起請と極楽和讃** \* 3 日本における弥陀念仏の広まり \* 4 三宗相対抄・三宗要録の作成 \* 5 和歌二首 **6 逝去** **7 藤原敦忠卿の第一女の夢** \* 8 金龍寺が往生の霊地たること \* 9 絵巻作成の発願

上中下三巻の『金龍寺縁起』において、記述の重心を金龍寺の伽藍建立や再興などに置かず、はじめから下巻第7段までは、延々と千観の伝記が記されている。しかも大半は、現存するほかの千観伝には確認できない、いわば『金龍寺縁起』独自の記録となる。例えば、中巻第7段にみられる、千観と源為憲との間に交わした書簡は、他書に収録されていない貴重な平安朝漢詩文資料である。また下巻第2段に全文が収載されている、千観作「八箇条起請」「極楽和讃」は、他の千観伝からその存在を知ることができるもの、内容をうかがうことはできなかった。

『金龍寺縁起』では、千観は橘敏貞の子で、清水寺の観音の申し子として生まれたとする。千手観音

の利生であるため、千観という幼名が付けられ、出家した後も改名はしなかったと伝える。

### 三 『今昔』所収話

次に、『今昔』巻第十五第十六話「比叡山千観内供、往生語」の本文を掲げる（傍線などの記号やゴシック体部分など、すべて私に附した。以下、特筆のない限りすべて同じ）。

I a 今昔、比叡ノ山ノ□□□□ニ千観内供ト云フ人有ケリ。俗姓ハ橘ノ氏人也。其ノ母初メ子無クシテ、窃ニ心ヲ至テ観音ニ子ヲ儲ケム事ヲ祈申ケルニ、母ノ夢ニ、一茎ノ蓮花ヲ得タリ、ト見テ後、幾ノ程ヲ不經ズシテ懐任シテ、千観ヲ産タリケル也。其ノ後、其ノA児漸ク長大シテ、B比叡ノ山ニ登テ出家シテ、名ヲ千観ト云フ。

II b 其ノ後□□□□ト云フ人ヲ師トシテ頭蜜ノ法文ヲ兼学ブニ、心深く智リ広クシテ、二道ニ於テ悟リ不得ズト云フ事無シ。食物ノ時・大小便利ノ時ヲ除テハ、一生ノ間、法文ニ不向ザル時ハ無シ。亦阿弥陀ノ和讃ヲ造ル事二十余行也。京・田舎ノ老小・貴賤ノ僧此ノ讃ヲ見テ、興ジ翫テ常ニ誦スル間ニ、皆極楽浄土ノ結縁ト成ヌ。而ルニ、c 千観本ヨリ心ニ慈悲深クシテ、人ヲ導キ畜生ヲ哀ブ事無限シ。

III 而ル間、d 千観八事ノ起請ヲ造ル。此レ僧ノ行トシテ可翔キ事ヲ誠ル故也。亦、十ノ願ヲ発シテ、衆生ヲ利益セムガ故也。千観夢ニ、止事無キ人来テ、告テ云ク、「汝チ道心極テ深シ。豈ニ極楽ノ蓮

花ヲ隔テムヤ。善根量無シ。定メテ弥勒ノ下生ノ暁ヲ期セムト告グ、Cト見テ、夢覺テ後、泣とク悲ビ貴ビケリ。

IV 亦、権中納言藤原ノ敦忠ノ卿ト云フ人ノ第一ノ女子有ケリ。年来千観ニ師壇ノ契ヲ成シテ、深く貴敬フ事無限シ。而ルニ、千観ニ語テ云ク、「師命終テ後、必ズ生レ給ヘラム所ヲ示シ給ヘ」ト。D千観此レヲ聞テ後、年月ヲ経テ、遂ニ命終ラムト為ル時ニ臨テ、手ニ造ル所ノ願文ヲ捲リ、口ニ弥陀ノ念仏ヲ唱ヘテ失ニケリ。

V 其後、彼ノ女ノ夢ニ、千観蓮花ノ船ニ乗テ、昔シ造レリシ所ノ弥陀ノ和讃ヲ誦シテ、西ニ向テ行ク、ト見ケリ。夢覺テ後、女、「昔シ生レム所ヲ示セト契リシヲ、此レ告タル也」Eト思テ、涙ヲ流シテ、喜ビ貴ビケリトナム語り伝ヘタルトヤ。

内容から、I 出自・出生・出家、II 受法・日ごろの行業（和讃の作成）、III 八事の起請・往生の夢告、IV 藤原敦忠の女との約束・千観入滅、V 藤原敦忠の女の夢と分けることができる。『今昔』と『金龍寺縁起』の共通部分には、千観の出生・出家・往生のほか、日ごろの行業の代表として、「八事ノ起請」「阿弥陀ノ和讃」の作成が語られる。ところが、ゴシック体で示したのは、原拠の『極楽記』になく、『今昔』の独自記述である。参考として、『極楽記』第十八話の原文を掲げる。

延暦寺阿闍梨伝灯大法師位千観、俗姓橘氏。其母無レ子、窃祈ニ観音一、夢得ニ蓮華一茎一、後終有レ娠、誕ニ于闍梨一。闍梨心有ニ慈悲一、面無ニ瞋色一。兼ニ学顕密一、莫レ不ニ博涉一。除ニ食時一外、不レ去ニ書案一。作ニ阿弥陀和讃廿余行一、都鄙老少以為ニ口実一。極楽結縁者往々而多矣。闍梨夢、有レ人語曰、信

心是深、豈隔極樂上品之蓮<sup>一</sup>、善根無量、定期<sup>二</sup>弥勒下生之暁<sup>一</sup>。閻梨以<sup>二</sup>八事<sup>一</sup>而誠<sup>二</sup>徒衆<sup>一</sup>、發<sup>三</sup>十願<sup>一</sup>而導<sup>二</sup>群生<sup>一</sup>。遷化之時、掘<sup>二</sup>願文<sup>一</sup>、口唱<sup>二</sup>仏号<sup>一</sup>。權中納言敦忠卿第一女子、久以為<sup>レ</sup>師。相語曰、大師命終之後、夢中必示<sup>二</sup>生処<sup>一</sup>。入滅未<sup>レ</sup>幾夢、閻梨上<sup>二</sup>蓮華船<sup>一</sup>、唱<sup>二</sup>昔所作弥勒贊<sup>一</sup>西行焉。

『今昔』は『極樂記』に基づき構成されてはいるが、記述の順序が異なる部分もある。例えば、『極樂記』の順番では、傍線部 c はⅡのはじめに、傍線部 d はⅢの末尾（千観の夢の後）に、傍線部 e はⅣのはじめ（藤原敦忠の娘の話の前）に配置している。

そして『今昔』の独自記述、特に千観の出生・出家・逝去については、集内の他説話から表現を流用することが多い。例えば、傍線部 a と b における欠字については、乾克己氏の指摘（10）の通り、「前話にみえる「今は昔、比叡ノ山東塔ニ長増トイフ僧有ケリ。幼クシテ山ニ登リテ出家シテ、名祐律師ト云フ人ヲ師トシテ顕密ノ法文ヲ学ブニ心深ク智リ広クシテ皆其ノ道ニ極メタリ」という叙述形式に当てはめようと」するための意識的欠字である（傍線は乾氏論文による）。また、波線 A ～ E は、それぞれ『今昔』の他の説話に類似表現を見出すことができる。

A … 卷第二十七話「迦毘羅城金色長者語」には、「児漸ク長大ニシテ出家ノ心有テ、父母ニ出家ヲ許セト乞フ」とある。

B … 卷十二第三十三話「多武峰増賀聖人語」には、「児、年十歳シテ、遂ニ此比叡ノ山ニ登テ、天台座主ノ横川ノ慈恵大僧正ノ弟子ニ成テ、出家シテ名ヲ増賀ト云フ」とある。

C…卷六第三十八話「震旦会稽山陰県書生、書写維摩經生浄土語」には、「ト見テ、夢覺テ後、書生、涙ヲ流シテ泣キ悲ムデ」とある。

D…卷九第三十三話「震旦大史令、傳奕、行冥途語」ニハ、「傳奕、其夢ヲ聞テ後、數日ヲ経テ死セ、ル也トナム語り伝ヘタルトヤ」とある。

E…卷十五第四十六話「長門国阿武大夫、往生兜率語」の話末評には、「此レヲ聞ク人、皆、涙ヲ流シテ喜ビ貴ビケリ。此レヲ思フニ、年来、悪ヲ行ズト云ヘドモ、思ヒ返テ善ニ趣ヌレバ、此ク貴キ也トナム語り伝ヘタルトヤ」とある。

以上のように、『今昔』は『極楽記』に基づきながら、記述の順序を変えたり、集内の他説話から表現を流用したりして、千観の往生伝を再構成した。

## 四 千観の出生および出家

本節では、千観の出生および出家に関する記述を、『今昔』『金龍寺縁起』から抽出して比較を行う。

### 四・一 千観の出自

#### 『今昔』

俗姓ハ橘ノ氏人也。



## 『金龍寺縁起』

俗姓橘氏。中納言公頼卿の二男、相模守敏貞朝臣の胤子なり。

『今昔』では千観の俗姓が橘だと記すのみであるが、『金龍寺縁起』では千観を橘公頼の孫で、橘敏貞の子とする。『金龍寺縁起』の記述を裏付ける資料の一つに、『尊卑分脈』所収の橘氏系図がある。それによると、千観には実因(いん)(九四五〜一〇〇〇)という兄弟がいる。一方、『群書類従』第五輯・系譜部所収『橘氏系図』(永祿年間(一五五八〜一五六九)頃成立か)には、敏貞の子としては実因しか記されていない。千観と実因との間には二十七歳の年齢差がある。しかも『今昔』の文脈から、千観の母が千観を産んだ後にまた別の子を産んだとしても特に問題ないが、『金龍寺縁起』上巻第1段によると、千観の母は宿縁によって一人の子をも設けることができなかつたため、清水寺の観音に懇切に祈願してようやく千観という子が授かつたという。したがって、『金龍寺縁起』の文脈に沿って考えていくと、千観に弟は存在しないはずである。『金龍寺縁起』における千観の出自について、佐藤哲英氏は「寺記縁起の通有性としてにはかに信用し難い」と指摘している(いん)。

## 四・二 千観の誕生

### 『今昔』

其ノ母初メ子無クシテ、窃ニ心ヲ至テ観音ニ子ヲ儲ケム事ヲ祈申ケルニ、母ノ夢ニ、一茎ノ蓮

花ヲ得タリ、ト見テ後、幾ノ程ヲ不經ズシテ懷任シテ、千觀ヲ産タリケル也。

### 『金龍寺縁起』

其母子なきによりて竊に清水寺の観音に祈請す。然間、夢の中に観音しめしてのたまはく、汝一子をまうくべき宿縁なし。望むところかなひがたし。爰に母なく／＼申すやう、我にもし往因あらませかば、さきより子をまうけてよし。何ぞあながちに大聖の利益をたのみむ。今宿業なきによりて偏に大悲の誓願を仰て申すところ、つゝにむなくば、たれか薩埵の利生を信ずべきや。其時、観音の御手より蓮花一華を給はる。夢さめて後、身あるべきことをしりぬ。歸て此よしをかたるに、よろこぶことかぎりなし。幾の程をへずして即懷妊のしるしあり。託胎月みちて延喜十八年「戊寅」正月十八日、母くるしみなくして、つゝに端正の男子をうめり。『今昔』において、千觀の母が最初子どもがいなかったので、至心に観音に祈念したところ、一茎の蓮華を得たという夢を見て、しばらくして懷妊して千觀を産んだという。ここでは、千觀が観音菩薩の申し子であるとされる。一方『金龍寺縁起』において、千觀の母の祈念対象は清水寺の観音となつてゐるのみならず、祈念の内容が細かく書かれており、千觀の生年月日まで記される。ここでは、千觀が清水寺観音の申し子であるとされる。

『今昔』には清水寺観音の靈驗譚が九話<sup>↑</sup>収録されており、申し妻の話がみられるものの、申し子譚はない。清水寺観音の申し子譚が多くみられるのは室町時代以降<sup>↑</sup>となる。『金龍寺縁起』所収千觀伝はその

先駆けであろう。同類話のうち、千観の千手観音化身説は園城寺関係資料（『三井往生伝』『寺門高僧記』『園城寺伝記』『寺門伝記補録』など）に多く確認できるものの、清水寺観音とするものは、前田家尊敬閣文庫蔵『雑談鈔』第十五話「覚圓千観ニ從ヒ学ブ事」「付、千観出生ノ事」<sup>15)</sup>のみである。

件内供ハ清水寺千手観音化身也。仍名ニ千観一也。其由緒者、母參ニ籠清水寺ニ一祈請云、後世菩提助<sup>ケ</sup>ベ  
カラム子一人賜候<sup>ハ</sup>ハムト申ス。爰自ニ内陣一無<sup>レ</sup>止<sup>コト</sup>高僧出来<sup>テ</sup>云、汝先世<sup>ニ</sup>子無、縁力不<sup>レ</sup>及。雖<sup>レ</sup>然我為<sup>レ</sup>  
子<sup>ト</sup>宿<sup>ト</sup>ニ汝胎<sup>ニ</sup>一見、夢覺了。不<sup>レ</sup>幾懷妊<sup>テ</sup>、生<sup>ニ</sup>千観内供<sup>ヲ</sup>一。「云云」

また『癡心集』卷一第四話「千観内供、遁世籠居の事」<sup>16)</sup>には、千観の千手観音化身説のほか、現存しない「千観伝」についての言及がみられる。該当箇所を示すと、次のようにある。

されど、猶かしこも心に叶はずやありけん、居所思ひわづらはれける程に、東の方に金色の雲の立ちたりければ、其の所を尋ねて、そこに形の如く庵を結びてなん、跡を隠せりける。即ち、今の金龍寺と云ふは是なり。かしこに年来行ひて、終に往生をとげたりける由、くはしく伝に記せり。

此の内供は、人の夢に、千手観音の化身と見えたりけるとかや。千観と云ふ名は、彼の菩薩の御名を略したるになむありける。

千観は箕面山に籠居していたが、心になわなかつたため、新しい居所を探したところ、金色の雲が立つ場所に辿り着いて庵を結び止住した。そこがすなわち金龍寺なのである。千観が金龍寺で長年修行して、やがて往生を遂げたことは、くわしく千観の伝に記されている。千観は人の夢で千手観音の化身であるとみえた。千観という名前は、かの千手観音の御名を略したものであるという。

この箇所について、乾氏は「園城寺の説話圏で発生した伝承であり、長明はこれを説話の中に採用したものとするの対して、湯谷氏は「この「伝」が『金龍寺縁起』のごときものではないか。(中略)『発心集』は『金龍寺縁起』が材料の一部として利用したであろう原『千観伝』に直接依るもの」とする。『発心集』が依拠した現存しない「千観伝」を、『金龍寺縁起』も参照していると推測できるが、そこにおいて千観の誕生がどのように語られているのかは明確ではない。

以上のように、千観の出生をめぐる言説が、観音の申し子(『極楽記』『今昔』『扶桑略記』『三井往生伝』)から、千手観音の化身(『発心集』『私聚百因縁集』『元亨釈書』『寺門高僧記』『園城寺伝記』『寺門伝記補録』『日本大師先徳明匠記』)へ、さらに清水千手観音の申し子(『雑談抄』『金龍寺縁起』)へと、徐々に限定されていったのではないか。『今昔』の段階では、千観が清水寺観音の申し子という説は未成立であったと推測され、『雑談抄』が成立した鎌倉初期からはじめてみられるようになる。

#### 四・三 千観の出家とその名前の由来

##### 『今昔』

其ノ後、其ノ兎漸ク長大シテ、比叡ノ山ニ登テ出家シテ、名ヲ千観ト云フ。

##### 『金龍寺縁起』

千手観音の利生なるが故に、即其子を千観とぞ名付けられける。(中略)遂に春秋十二歳にして、

比叡山によぢのぼりて智証大師の門徒にくはり、運照内供の室に入て出家得度をとげてのちもなを、わらはなをあらためず千観とぞいはれ給ひける。

千観という名前の由来について、『今昔』では出家後の法名とする一方、『金龍寺縁起』では千手観音の利生を蒙つて生まれた子であるため、童名として呼ばれ続けて、出家した後も改名しなかったとする。ただ『今昔』は何かほかの文献に依拠したというよりも、第三節で論じたように、一種の文飾と考えた方が適切かと思われる。これと近似した記述が『今昔』の別の説話（巻十二第三十三話「多武峰増賀聖人語」）にもみられるからである。

ところで、『金龍寺縁起』において、千観が千手観音の化身である説を一貫して主張している。『金龍寺縁起』上巻第5段には次のような話がある。

①内供御齋会をつとめ給ける時、夜宿にをよびて南都の義照院と一所に宿せられたりけるあいだ、幕をへだてゝふし給ひけり。義照院は南枕、内供もまたみなみ枕にぞふし給ひける。こゝに内供夢の中に阿弥陀ほとけのかうべをふまへてふしたりと見給けり。ゆめさめていそぎおきて幕をかきあげて見給ければ、義照院にておはしけり。あさましと思ひすなはち発露して三度礼拝し給ふ。此あいだ、義照院又夢のうちに普賢大士三度我を礼拝し給ふと見給ひけり。覺てのち、もろともに夢をかたりて、たがひになみだをぞながし給ひける。②但内供はこれ千手観音の化身なりとある人夢に見たてまつれる。なをしかるをいま普賢の身を示現し給ふこと、相違あるににたりといへども、大権示現、かならずしも一種にかぎるべからず、迹類の化身、その姿まち／＼なるべし。以種と形遊諸国土とのべたり。

観音なんぞ普賢の身を示し給はざらむ。示現普身等一切とあかせり。たとひ普賢たりといふとも観音の身を現し給ふべし。況や又義照院は普賢を信じ内供は弥陀を信ずる人なるが故に、たがひにしめし給けるにや。二人ともに大権の化現うたがふべきにあらず。

①御齋会に勤める期間、千観と義昭が同じ宿に泊まった。千観は自身が阿弥陀仏の頭を踏んで臥しているのを夢見て、覚めてからいそぎ幕を挙げてみると義昭が枕を南に寝ており、すぐに懺悔して義昭を三度礼拝した。一方、義昭は普賢菩薩が自分を三度拝んだと夢見た。覚めてから共に夢を語り合い、互いに涙を流したという。②ある人は千観が千手観音の化身であると夢見た。しかしこのたび普賢菩薩の姿を示現したのは、権者の示現は必ずしも一種に限られず、垂迹の化身はその姿それぞれ異なるのであるからだとする。観音も普賢も様々な姿を示現するのであろう。義昭は普賢菩薩を信じ、千観は弥陀を信じる人であったため、互いにその信仰に合わせて示現したのであろうという。

前半①は、『古事談』巻三第三十八話や『三国伝記』巻五第十八話「義照院与千観内供同宿夢事」に同話がみられる。これらの話を見る限りでは千観が普賢菩薩の化身であると解釈することもできるが、『金龍寺縁起』後半②においては、説話①とほぼ同じ文章量を用いて、千観が千手観音の化身である説を補強しているのである。千観の出家とその命名と直接的な因果関係を持たない以上、命名の根拠となる千手観音化身説を保証するためには、あれほど大量のことばを費やす必要があったからであろう。

## 五 『金龍寺縁起』の作者と成立時期

『金龍寺縁起』の作者と成立時期について、湯谷氏は次のように述べている。<sup>18)</sup>

縁起末尾の記述と、縁起中巻第九段と『閑居友』との関係から、『金龍寺縁起』は『閑居友』の編者である慶政あるいはその周辺で作成されたものではないかと推定される。すると、その作成の時期は、『閑居友』の成立とされる承久四年（一一二二）以降であり、特に將軍頼経の在任期間は嘉祿二年（一一二六）から失脚する寛元二年（一一四四）までの間であるから、『金龍寺縁起』の成立もこの頃ではないかと思われる。（中略）この縁起は絵巻作成の費用を勧進するために製作されたと思われる。この絵巻は現存しないが、この縁起はその詞書である可能性が高い。先に推定した縁起成立期間の中で、千観について特に記念となるような年を考えると、その没後二百五十回忌にあたる天福元年（一一三三）が注意される。

湯谷氏は『金龍寺縁起』の作者について『閑居友』を撰述した慶政（一一八九～一二六八）、あるいはその周辺の者と想定し、一二二六～一二四四年の間の成立とする。とりわけ、一二三三年が千観の二百五十回忌にあたるため、その記念事業の一つとして『金龍寺縁起』が作られたのではないかと注目している。

本節では、慶政自筆本「千観内供起請」（宮内庁書陵部図書寮文庫蔵）<sup>19)</sup>と、『金龍寺縁起』下巻第2段所収「八箇条起請」とを比較し、『金龍寺縁起』下巻第5段所収勅撰集入集歌の考察を通して、湯谷氏の

説を再検討したい。

まず、『金龍寺縁起』下巻第2段所収「八箇条起請」と慶政自筆本「千観内供起請」を掲げる。

「八箇条起請」

F 一、自<sub>レ</sub>病患<sub>ニ</sub>之外、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>欠<sub>ニ</sub>例時勤<sub>一</sub>

一、念誦読経之中間、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>交<sub>ニ</sub>世俗言論<sub>一</sub>

一、常守<sub>ニ</sub>身・口・意<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>談<sub>ニ</sub>他好悪長短<sub>一</sub>

一、於<sub>ニ</sub>無益言論<sub>一</sub>、縦<sub>レ</sub>得<sub>ニ</sub>其理<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>諍論<sub>一</sub>

一、於<sub>ニ</sub>親友同行<sub>一</sub>、一事以上、不<sub>レ</sub>内外隔<sub>一</sub>

一、往生極楽之外、永可<sub>レ</sub>絶<sub>ニ</sub>世俗悒望<sub>一</sub>

一、於<sub>ニ</sub>修学事<sub>一</sub>、雖<sub>レ</sub>非<sub>ニ</sub>其器<sub>一</sub>、致<sub>ニ</sub>慇懃<sub>一</sub>必成就

一、繫<sub>ニ</sub>心於如来禁戒<sub>一</sub>、常愧<sub>ニ</sub>我罪業<sub>一</sub>

若違<sub>ニ</sub>此八事<sub>一</sub>、当<sub>レ</sub>知地獄人、若順<sub>ニ</sub>此八事<sub>一</sub>、当<sub>レ</sub>知浄土人。

G 寅卯「修<sub>ニ</sub>行観法<sub>一</sub>」 辰巳「転<sub>ニ</sub>読文書<sub>一</sub>」

午未「徒衆同学」 申酉「文義暗誦」

戌亥「問<sub>ニ</sub>師要決<sub>一</sub>」 子丑「休息全身」

右、H 子臥寅起餘不<sub>レ</sub>眠、止<sub>ニ</sub>無益語及往還<sub>一</sub>。若修若学捨<sub>ニ</sub>懈倦<sub>一</sub>、寸陰寸時勿<sub>ニ</sub>徒然<sub>一</sub>。制<sub>ニ</sub>禁忌<sub>一</sub>馬<sub>ニ</sub>常加鞭<sub>一</sub>、釣<sub>ニ</sub>得心魚<sub>一</sub>莫<sub>レ</sub>放<sub>レ</sub>筌。I 繫<sub>ニ</sub>念往生極楽蓮<sub>一</sub>、遂<sub>ニ</sub>此身塵<sub>一</sub>惑障牽<sub>一</sub>。J 念<sub>ニ</sub>仏黄昏<sub>一</sub>心



寂々、観<sub>二</sub>身<sub>一</sub>晝漏<sub>二</sub>涙<sub>一</sub>漣々。骸<sub>二</sub>在<sub>二</sub>於<sub>一</sub>閻浮蓬下<sub>一</sub>、神愁<sub>二</sub>於<sub>一</sub>閻魔<sub>一</sub>庁前<sub>一</sub>。若有<sub>下</sub>接<sub>二</sub>念<sub>一</sub>山林<sub>一</sub>之聖者<sub>上</sub>、採<sub>レ</sub>菓拾<sub>レ</sub>薪供<sub>二</sub>給<sub>一</sub>所須<sub>一</sub>、若有<sub>下</sub>建<sub>二</sub>立<sub>一</sub>堂塔<sub>一</sub>之輩<sub>上</sub>者、伐<sub>レ</sub>杣下<sub>レ</sub>筏造<sub>二</sub>畢<sub>一</sub>作事<sub>一</sub>。煩惱家狗打而不<sub>レ</sub>去、菩提野鹿繫而難<sub>レ</sub>馴。随<sub>レ</sub>世似<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>望、背<sub>レ</sub>俗如<sub>二</sub>狂人<sub>一</sub>。不寧世間哉、何処隱<sub>二</sub>身<sub>一</sub>。K信心是深、豈隔<sub>二</sub>極<sub>一</sub>樂上品之蓮<sub>一</sub>、善根無量、定期<sub>二</sub>彌<sub>一</sub>勒下生之晝<sub>一</sub>。以<sub>二</sub>八事<sub>一</sub>誠<sub>二</sub>徒衆<sub>一</sub>、發<sub>二</sub>十願<sub>一</sub>導<sub>二</sub>群生<sub>一</sub>矣。

### 慶政写「千観内供起請」

子臥寅起昼不<sub>レ</sub>眠

止<sub>二</sub>無益語<sub>一</sub>及往還<sub>一</sub>

若修若学捨<sub>二</sub>懈倦<sub>一</sub>

寸陰寸時莫<sub>二</sub>徒然<sub>一</sub>

制<sub>二</sub>禁意馬<sub>一</sub>常加<sub>レ</sub>鞭

鈎<sub>二</sub>得心魚<sub>一</sub>勿<sub>レ</sub>絶<sub>レ</sub>筌

繫<sub>二</sub>念極樂往生蓮<sub>一</sub>

遂此身塵<sub>二</sub>惑障牽<sub>一</sub>

両者を並べて比較すると、後者は前者の一部（傍線部H・I）にあたるものが気づくであろう。千観が制定した日常修行に関する、この八箇条の誠めについては、他に興然『五十卷鈔』卷五十所収「可守禁八箇条事」<sup>(20)</sup>や、西教寺正教蔵『菩提鈔』所収「千観内供八ヶ条起請」<sup>(21)</sup>や、大原如来蔵蔵八制篇額所載「千観

尊者八制<sup>(2)</sup>」が知られる。煩をいとわず、以下に諸本の原文を掲げる（『金龍寺縁起』所収「八箇条起請」と重なる文言に傍点を附した）。

『五十卷鈔』所収「可守禁八箇条事」「撰津国千観内供」

- 一、自非<sup>レ</sup>病患<sup>ニ</sup>之外、例時之勤任<sup>レ</sup>意不<sup>レ</sup>可<sup>ニ</sup>闕怠<sup>一</sup>
  - 一、念誦読経間、自非<sup>ニ</sup>要事<sup>一</sup>之外、不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>為<sup>ニ</sup>世俗言論<sup>一</sup>
  - 一、不<sup>レ</sup>論<sup>ニ</sup>親疎<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>説<sup>ニ</sup>他人好悪長短<sup>一</sup>
  - 一、於<sup>ニ</sup>無益事<sup>一</sup>、縦雖<sup>レ</sup>得<sup>ニ</sup>其理<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>可<sup>ニ</sup>諍論<sup>一</sup>
  - 一、於<sup>ニ</sup>親友同行<sup>一</sup>勿<sup>レ</sup>隔<sup>レ</sup>事。一切衆生亦復如<sup>レ</sup>是
  - 一、於<sup>ニ</sup>修学<sup>ニ</sup>事<sup>一</sup>、縦雖<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>堪<sup>ニ</sup>其器<sup>一</sup>、勤愍<sup>勤</sup>現身必成
  - 一、興法利生往生極樂之外、可<sup>レ</sup>停<sup>ニ</sup>止諸希望<sup>一</sup>
  - 一、繫<sup>ニ</sup>心於如来禁戒<sup>一</sup>、常<sup>可</sup>レ<sup>レ</sup>慙<sup>ニ</sup>三業之過咎<sup>一</sup>
- 以<sup>ニ</sup>前八条<sup>一</sup>、各発<sup>ニ</sup>勇猛之心<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>違者。若違<sup>ニ</sup>此事<sup>一</sup>者、当<sup>レ</sup>知我地獄人心。若順<sup>ニ</sup>八箇条<sup>一</sup>、誠<sup>ニ</sup>者、当<sup>レ</sup>知我浄土人。夜臥可<sup>レ</sup>計<sup>ニ</sup>今日三業罪過<sup>一</sup>、曉更可<sup>レ</sup>誓<sup>ニ</sup>不作罪努力<sup>一</sup>。

『菩提鈔』所収「千観内供八ヶ条起請」

- 一、自非<sup>ニ</sup>病患<sup>一</sup>之、不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>闕<sup>ニ</sup>例時勤<sup>一</sup>
- 一、念誦読経中間、自要須事、不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>永<sup>永</sup>世間言語<sup>一</sup>
- 一、不<sup>レ</sup>論<sup>ニ</sup>親疎<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>説<sup>ニ</sup>他人好悪長短<sup>一</sup>

- 大原如来藏藏八制篇額所載「千觀尊者八制」
- 一、於無益言語、雖得其理、不可諍論
  - 一、於親友（同分）因行、勿相隔本。已上。乃至一切衆生如是
  - 一、興法利生往生極樂之外、可停心餘希望
  - 一、繫如来之禁戒、常慚愧我三業咎
  - 一、縱非其器、慇懃現身必遂修學之本意

- 一、自病患之外、不可闕例時勤
  - 一、念誦読経中、不可交世俗言論
  - 一、常守身・口・意、不談他好悪長短
  - 一、於無益言論、縱得其理、不可諍論
  - 一、於親友同行、一事已上、不内外隔
  - 一、往生極樂之外、永可絶世俗希望
  - 一、於修學事、雖非其器、致慇懃必成就
  - 一、繫心於如来禁戒、常愧我罪業
- 若違此八事、当知地獄人  
若順此八誡、当知淨土人

右の通り、『五十卷鈔』所収「可守禁八箇条事」・『菩提鈔』所収「千觀内供八ヶ条起請」・大原如来藏藏

八制篇額所載「千観尊者八制」の三つは、内容に文字の異同が確認できるものの、基本的に『金龍寺縁起』所収本の傍線部Fにあたり、慶政自筆本「千観内供起請」とは内容が異なる。そのうち、大原如来蔵蔵八制篇額所載本はFに最も近似する。

さらに、傍線部G・Hは尊經閣所蔵『温故知新書』所引千観の「修学六時作法」と内容が重なり、Jは鎌倉時代中期成立の『和漢兼作集』において千観「碑文之作」の摘句として採録されており、Kは前掲『極楽記』の傍点部と一致する。

以上、「八箇条起請」現存諸本の比較、および千観の逸文との照合を通して、『金龍寺縁起』所収本の特徴を考察してみた。『金龍寺縁起』所収「八箇条起請」は、慶政自筆本や、九条家の人々が編纂に携わった書物に収録される逸詩、また伝存資料に確認できる千観のその他の作品などを組み合わせてできたようなものである。したがって、慶政が『金龍寺縁起』を作成したというよりも、『金龍寺縁起』の作者は作成にあたり、慶政ひいては九条家の蔵書などを収集し利用したと考えられよう。

次に、『金龍寺縁起』下巻第5段所収、勅撰集入集歌について考察する。

つねに哥などをもよみ給けり。

法身の月はわがみを照せども

無明の雲のみせぬなりけり

といふ詠哥は勅撰の中にも入れるとかや。

右の歌は、千観が詠んだもので、「題しらず」として『新勅撰和歌集』卷十・釈教歌に採録されている

ため、「勅撰」は第九番目の勅撰和歌集である『新勅撰和歌集』を指している。これを踏まえると、「法身の月」歌の勅撰集入集を記した『金龍寺縁起』は、『新勅撰和歌集』が完成した文暦二年（一二三三）以降の成立となる。したがって、『金龍寺縁起』の作成は、湯谷祐三氏が推定した千観の二五〇回忌（天福元年（一二三三））を記念するための事業とは考えられない。

## 六 おわりに

千観の一代記を記録した『金龍寺縁起』には他書未見の伝承や詩文が収められている。小稿では、『金龍寺縁起』の全文翻刻を試みるとともに、縁起所収千観伝の特徴を考察するにあたって、独自の記述を有する『今昔』巻第十五第十六話と比較を行った。まず、原拠の『極楽記』にみられない『今昔』の独自記述は、『今昔』内部他の説話との類似性が確認できることから、『今昔』の撰者による文飾であることが推測できる。

また、千観の出生と出家をめぐる、『金龍寺縁起』の伝承と『今昔』の記述は異なる。『金龍寺縁起』では千観の誕生を一貫して清水寺千手観音の利生によるものだとするのに対して、『今昔』ではただ観音の申し子譚とする。この違いは両書における千観の命名由来の差異とも連動している。片方は千手観音の利生によるものとするが、もう片方は出家した後の法名とする。ところが、千観が千手観音の化身である説は、園城寺関係資料にもみられるが、清水寺観音とするものは殆んどない。そのうえ、『金龍寺縁

『起』には、他の千観説話にみられない清水寺関連の独自記事（中巻第3段）が含まれる。どうやら『今昔』の段階では、千観が清水寺観音の申し子であるという説はまだ成立しなかったようである。『金龍寺縁起』における千観の出生譚にみる特異性については、縁起の成立に清水寺関係者がかかわっていたことが考えられる。

『金龍寺縁起』の作者およびその成立時期について、湯谷祐三氏の説を検証したところ、縁起所収千観の「八箇条起請」が慶政自筆本と内容が一致しないことから、園城寺出身の慶政が『金龍寺縁起』に直接関与したというよりも、慶政と交流があつて、九条家の蔵書を参看できた人物が作成に携わつたと考えた方が妥当であろう。また、『金龍寺縁起』成立の上限が、『新勅撰和歌集』の成立した文暦二年までくだることから、『金龍寺縁起』は、千観の二五〇回忌を記念するために作成されたものではないことが明らかである。

「使用テキスト」主に以下に依拠しつつ、適宜、句読点等を私に改めた。

『極楽記』 日本思想大系。『今昔』 『古事談』 新日本古典文学大系。『扶桑略記』 『元亨釈書』 『帝王編年記』 新訂増補国史大系。『雑談鈔』 『碧沖洞叢書』 第四十一輯。『発心集』 『古今著聞集』 新編日本古典集成。『三井往生伝』 田嶋一夫・小峯和明・播磨光寿「教林文庫『三井往生伝』翻刻と研究」(『中世文学 資料と論考』、笠間書院、一九七八・一一)。「私聚百因縁集」『園城寺伝記』 『寺門伝

記補録』『日本大師先徳明匠記』『東国高僧伝』『本朝高僧伝』∥大日本仏教全書。『寺門高僧記』∥続群書類従。『三国伝記』∥中世の文学。『扶桑隱逸伝』∥早稲田大学図書館蔵寛文四年（一六六四）版本。

〔注〕

（1）佐藤哲英氏は、「千観内供の研究」（『宗学院論輯』第三〇輯、一九二九・一〇）において、各史資料における千観の伝記事項を抽出し一覧表にまとめている。

（2）正徳元年（一七一―）刊行の『山城名勝志』巻十五・愛宕郡「念仏寺」条には「頼郷」と、天明六年（一七八六）刊行の『都名所図会』巻二・平安城尾「等覚山念仏寺」条には「頼顛」と、寛政八（十年（一七九六）一七九八）刊行の『撰津名所図会』巻五・島上郡「邂逅山金龍寺紫雲院」条には「敏定」とある。

（3）金龍寺は、大阪府高槻市成合地区なりあいの山中（檜尾川が形成する成合谷の東側に面した安満山の東北山腹）にあった天台宗寺院。邂逅山紫雲院と号し、本尊は普賢菩薩。本堂は一九五一年に比叡山に移されて無住となり、設置されていた仮本堂も一九八三年に起きた本堂裏手の便所の火災で全焼し、以降廃寺となった。『日本歴史地名大系』（平凡社、一九八六・二）大阪府高槻市成合村「金龍寺」条や、公益財団法人大阪府文化財センター編集『金龍寺旧境内跡5』（公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第321集、二

〇二二・八) 第三章第二節「金龍寺の歴史」など参照。

- (4) 天台山兜率谷鶏頭院旧蔵写本で、他の伝本が確認できない孤本である。書写奥書によると、江戸時代の中台僧巖覚(一六五九〜一七二〇)が金龍寺蔵本を底本として元禄十三年(一七〇〇)に謄写したものであることが分かる。巖覚は、はじめ比叡山横川にある鶏頭院の第八世として住持したが、正徳四年(一七一〇)正月より恵心院に移り第十一世となった。田嶋一夫「教林文庫考(覚書)」(『調査研究報告』第六号「早大図書館教林文庫目録稿」、国文学研究資料館文献資料部、一九八五・三)、八〜九頁参照。
- (5) 教林文庫の典籍が早稲田大学中央図書館特別資料室に所蔵されるようになった経緯については、田嶋注(4)前掲論考参照。詳細な典籍目録については、吉原浩人『「教林文庫」の研究』(平成13年度〜平成15年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)(13610050)研究成果報告書、二〇〇四・三)参照。
- (6) 湯谷祐三「早稲田大学図書館教林文庫蔵『撰州金龍寺縁起』について―中世の説話集における千観―」(『名古屋大学国語国文学』第八七号、二〇〇〇・一一)参照。
- (7) 醍醐寺僧隆源(一三四一〜一四二五)の手による。乾克己「千観阿闍梨の伝と説話について」(『和洋女子大学紀要 文系編』第三一号、一九九一・三)、稻垣泰一「13 撰津国金龍寺縁起 解題」(総本山醍醐寺編集『醍醐寺叢書 研究篇 枝葉抄 影印・翻刻・註解』第一部、勉誠出版、二〇一〇・七)参照。
- (8) 『撰津名所図会』巻五・島上郡「邂逅山金龍寺紫雲院」条には、「寺記等の大意」として『金龍寺縁起』の抄出がみられる。



(9) 市河寛斎(一七四九〜一八二〇)は、日本で漢詩の詠作が始まった近江朝から平安朝末期に至る漢詩を網羅しようとして、天明六年(一七八六)に『日本詩紀』を上梓した。そこから遺漏したものを収集し、後藤昭雄氏は二〇〇〇年に吉川弘文館から『日本詩紀拾遺』を刊行した。その後、拾遺作業を継続した後藤氏は、『金龍寺縁起』より、千観と源為憲との応酬詩を『日本詩紀拾遺』に採録した。後藤昭雄「日本詩紀拾遺 後補」(『成城文藝』第二二八号、二〇一四・九)、四六〜四七頁。

(10) 乾注(7) 前掲論文、三頁。

(11) 延昌の弟子。西塔具足房に住む。具房僧都、また小松僧都と称する。長徳四年(九九八)、極楽寺座主。説法の名手で、『今昔』巻十四第三十九話「源信内供於横川供養涅槃經語」・同巻二十三第十九話「比叡山実因僧都強力語」・『宇治拾遺物語』第六十八話「了延に実因、湖水の中より法文の事」にはその怪力譚などがみられる。『続群書類従』第五輯上・第百八巻所収『尊卑分脈脱漏』橘氏系図においても、実因と千観は兄弟で、敏貞の子とする。『本朝高僧伝』第九には「釈実因、相州刺史橘敏貞之子」とある。

(12) 佐藤注(1) 前掲論文、九頁。

(13) 巻十一第三十二話「田村將軍、始建清水寺語」、巻十六第九話「女人、仕清水観音蒙利益語」、巻十六第三十話「貧女仕清水観音、給御帳語」、巻十六第三十一話「貧女仕清水観音、給金語第三十一」、巻十六第三十三話「貧女、仕清水観音得助語」、巻十六第三十四話「無縁僧、仕清水観音成乞食得便語」、巻十六第三十七話「清水二千度詣男、打入双六語」、巻十九第四十話「檢非違使忠明、於清水值敵存命語」、巻十

九第四十一話「参清水女子、落入前谷不死語」。

(14) 清水寺史編纂委員会『清水寺史 第一卷 通史(上)』(法蔵館、一九九五・八、二五五〜二五六頁)によると、『宇治拾遺物語』が記す卷四ノ八「進命婦清水寺参事」という話は、子宝が授かる利生譚(申し子説話)の初期的形態として注目される。(中略)清水観音の申し子譚は、御伽草子「千手」「小式部」「李娃物語」など、室町時代の物語には多く記されており、このころの清水の観音に対する庶民の願い事を具體的に知るのである」と説明されている(山路興造執筆)。

(15) 園城寺関係の雑談三十二項を輯録した雑録。一一六五〜一二一五年の間の成立とされる。築瀬一雄「説話資料雑談鈔について」(『日本文学研究』第五号、一九四九・一〇)、同『雑談鈔』解題(『碧冲洞叢書』四十一輯、一九六三・一一↓『碧冲洞叢書』第七卷、臨川書店、一九九五・一二復刻)参照。

(16) 『私聚百因縁集』卷九第十六話、『三國伝記』卷一第二十一話「空也上人事」「并千観内供発心事」に同話。鈴木英之「卷九第十六話「千観内供遁世事」」(北海道説話文学研究会編『私聚百因縁集の研究 本朝篇(下)』、和泉書院、二〇二三・一〇)など参照。

(17) 乾注(7) 前掲論文、七頁。湯谷注(6) 前掲論文、一八頁。

(18) 湯谷注(6) 前掲論文、二五〜二六頁。

(19) 宮内庁書陵部『図書寮叢刊 伏見宮家九条家旧蔵 諸寺縁起集』(明治書院、一九七〇・三)、四六〜四七・二二二頁。

- (20) 『真言宗全書』第三十一卷、九九六頁。
- (21) 西教寺正教蔵 雑々二。国文学研究資料館マイクロフィルム請求記号…312・68・8・C。
- (22) 山口光圓「叡山の浄土教(中古の一)」、『宗学研究』第一二二号、一九三六・七)、一三二〜一三三頁。
- (23) 『大日本史料』第一編二〇冊・永観元年十二月十三日条。
- (24) 島津忠夫・日比野純三編『別本和漢兼作集と研究』(未刊国文資料第四期第六冊、未刊国文資料刊行会、一九七六・七)、九二。後藤昭雄氏は、『別本和漢兼作集』より、この摘句を『日本詩紀拾遺』に収録。『和漢兼作集』撰者の有力候補の一人に、慶政の弟の九条基家(一二〇三〜一二八〇)が想定される(島津前掲書、一〇七〜一〇八頁)。なお、仁木夏実『和漢兼作集』漢詩撰者考』(『詞林』第六四号、二〇一八・一〇)も参照。

【附記】本稿は、二〇二三年一〇月一四日、北海学園大学豊平キャンパス七号館D50教室で開催された国際シンポジウム「世界にひらく日本宗教文化」における口頭発表を基に成稿したものです。また、『金龍寺縁起』翻刻のご許可をくださった早稲田大学図書館、ご教示を賜りました阿部泰郎氏・阿部美香氏に厚く御礼申し上げます。

【附録】教林文庫蔵『金龍寺縁起』翻刻

凡例

一、本資料は、早稲田大学中央図書館教林文庫所蔵の『金龍寺縁起』（請求記号…文庫070029  
8）を底本として翻刻を行い、句読点や濁点を私に附した校訂本文である。

一、底本の書誌情報は次の通り。

外 題…撰州金龍寺縁起

内 題…金龍寺縁起

装 丁…袋綴じ（一冊。写）

法 量…27・6×19・9

書写年次…元禄十三（一七〇〇）年

印 記…朱方印・教林文蔵章、朱方印・徳順、朱方印・天台山兜率溪鶏頭院

奥 書…元禄十三年秋七月九日以金龍寺蔵本謄写／山門横川兜率谷鶏頭院蔵

一、字体は常用漢字を使用した。常用漢字以外のは正字を使用した。

一、読み仮名・音合符・訓合符などは省略した。

一、本文の通し番号は、私に附したものである。

## 金龍寺縁起上

1 摂津国金龍寺の千観内供は、俗姓橘氏。中納言公頼卿の二男、相模守敏貞朝臣の胤子なり。其母子なきによりて竊に清水寺の観音に祈請す。然間、夢の中に観音しめしてのたまはく、汝一子をまうくべき宿縁なし。望むところかなひがたし。爰に母なく／＼申すやう、我にもし往因あらませかば、さきより子をまうけてよし。何ぞあながちに大聖の利益をたのみむ。今宿業なきによりて偏に大悲の誓願を仰て申すところ、つゝみにむなくば、たれか薩埵の利生を信すべきや。其時、観音の御手より蓮花一華を給はる。夢さめて後、身あるべきことをしりぬ。帰て此よしをかたるに、よろこぶことかぎりなし。幾の程をへずして即懐妊のしるしあり。詫胎月みちて延喜十八年「戊寅」正月十八日、母くるしみなくして、つゝみに端正の男子をうめり。千手観音の利生なるが故に即其子を千観とぞ名づけられる。漸ひとゝなりてのち、心に忍辱をふくみて面にかれる色なし。永く俗塵にまじはらむことをおもはず、偏に仏弟子とならむとぞねがはれける。

2 遂に春秋十二歳にして、比叡山によぢのぼりて智証大師の門徒にくはり、運照内供の室に入て出家得度をとげてのちもなを、わらはなをあらためず千観とぞいはれ給ひける。千手院に住して一乗教を学す。子に臥寅に起て寸陰をきおひ、食時をのぞきては書案をさらす。かねて密教をうけてともに奥旨をきはめ給へり。一念三千の依正は心のうちにてらし、五相三密の観行はむねのあひだにおさめ給ふ。かゝりければ碩徳一天にきこえ、名誉四海にあまねし。

3 智証大師の門徒、三井寺にかよひはじめてのちは、内供も後の寺の南院のおくに修行坊といふ所にぞすみ給ひける。青巖砌に待て、紅葉窓をうづみ、松の嵐雨をふくみて、梶のむらたち雲をなせり。経行の庭苔ふかく坐禅の室人まれなりけれども、明肇僧都・慶祚大阿闍梨慶暹等のいみじき明匠たち、内供の御弟子として彼所におはしてぞ、頭密の奥旨を談じ給ひける。

4 天曆八年夏のすゑに、内供熊野山の長途に歩をはこび給ふ。権現はこれ西天より感応をたれて栢城を紀州にあらはし南山に権迹をしめして、答呪を所求にまかせ給ふ。すでに日本第一の大靈験といふ鷲鳥百をかさぬれども鸚にはしかず。衆星天につらなれども一月にはおよばざるがごとし。殊に難化の衆生をすくはむとちかひ、偏に無常の觀念をすゝめ給ひけること、本誓まことにたのもしく、悲願いよ／＼貴くおぼえ給ひて、内供はるかに婆羅門僧正のいにしへをとぶらひ、ちかくは智証大師のあとを尋給ふに、信水ふかくすみ、法施いさぎよかりければ、明感月はれて本地たかくかゞやく。すなはち児の宮にあたりて如意輪のかたちを現し給ふ。神遍まことにはかりがたく効験をしてしりぬべし。

5 内供御齋会をつとめ給ける時、夜宿にをよびて南都の義照院と一所に宿せられたりけるあいだ、幕をへだてゝふし給ひけり。義照院は南枕、内供もまたみなみ枕にぞふし給ひける。こゝに内供夢の中に阿弥陀ほとけのかうべをふまへてふしたりと見給けり。ゆめさめていそぎおきて幕をかきあげて見給

ければ、義照院にておはしけり。あさましと思ひすなはち発露して三度礼拝し給ふ。此あいだ、義照院又夢のうちに普賢大士三度我を礼拝し給ふと見給ひけり。覺てのち、もろともに夢をかたりて、たがひになみだをぞながし給ひける。但内供はこれ千手観音の化身なりとある人夢に見たてまつれる。なをしかるをいま普賢の身を示現し給ふこと、相違あるにいたりといへども、大権示現、かならずしも一種にかぎるべからず、迹類の化身、その姿まち／＼なるべし。以種と形遊諸国土とのべたり。観音なんぞ普賢の身を示し給はざらむ。示現普身等一切とあかせり。たとひ普賢たりといふとも観音の身を現し給ふべし。況や又義照院は普賢を信じ内供は弥陀を信ずる人なるが故に、たがひにしめし給けるにや。二人ともに大権の化現うたがふべきにあらず。

6 朝市にまじはりて公請などをつとめ給ひけれども、心のうちには偏に穢土をいとふおもひのみふかくして、浄土にむまれんことをぞのぞみ給ける。かゝりければ常のことぐさには、娑婆をいとふ心の懇切なるはこの界の運のつくるか、極楽をねがふ心の鄭重なるはこの界の縁の熟するかとぞの給ひける。かの三井寺のすみかは、西に長等山高く峙て日想観にたよりなしとて、しかるべからむ隠遁のすみかをぞ求め給ひける。世にしたがへば望あるにたり、俗にそむけば狂人のごとし。あなうのよの中や、いづれの所にか一身をかくさむと思ひわづらひて、年月をくくり給ひけるに、ある時、空也上人はあみだほとけの化身として念仏利生し給よし、夢に見給ことありければ、いかでか彼上人にあひたてまつりて往生極楽の指南をとひたてまつらむともひ給ける程に、時いたり縁や熟しけむ。天徳応和の

ころにや、公請をつとめて帰給けるに、四条河原にて、空也上人のわさつのをもち金鼓をうちて高声に念仏してとをり給けるに行あひ給にけり。内供いそぎ車よりおりて対面しての給ふやう、としごろ仏法を学して、顕密の修行を尋ぬといへども、名利の穴におちいりて、いまだ出離のたよりをえず。法財は六賊にうばわれ、命根は兩鼠のためにたへなんとす。現世の善因いまだ萌さざるに、当生の苦果既にちかづきぬ。いかにしてか後世たすかる事つかまつるべきときこえ給ひければ、上人これをきゝて、いかにさかさまことをばの給はするぞ。さやうのことをば貴房などにこそとひたてまつらんとおもへども、世におはする身なれば分衛のすがたにはゞかりて、むなしくまかりすぐるなり。かゝるあやしの愚者なればおもひえたる事さらになし。たゞいふかひなくてまよひありくばかりなりとこたへて、あらゝかにふりすてゝさりなんとぞし給ける。其時内供衣の袖にとりつきてねんごろにの給やう、菩提の妙果の成じがたきにはあらず、真の善知識のきはめてあひがたきなり。又菩薩の行には利他をさきとす。上人もし我ために善知識となり給はずは、あに大悲の願にそむき給にあらずや。はやく一言をうけ給はらむとあながちにの給ければ、上人このたびは術なくのがるべきかたなくて、いかにもたゞ身をすてゝこそとばかりいひかけて、はしたなくひきはなれ足ばやに行すぎて、心無<sub>二</sub>待所<sub>一</sub>、随<sub>二</sub>日晩<sub>一</sub>止、心無<sub>二</sub>住所<sub>一</sub>、雖<sub>二</sub>夜曉<sub>一</sub>行、忍辱衣厚、不<sub>レ</sub>痛<sub>二</sub>杖木瓦石<sub>一</sub>、慈悲室深、不<sub>レ</sub>聞<sub>二</sub>罵詈誶<sub>一</sub>との給ひて、金鼓を打て高声に念仏してぞさり給にける。

7 内供、空也のことばをきゝ給ふに、弥我身のありさまをろかにおぼえて、高蓋の車にのるもの、うれ



へおほき事をしりぬ。又上人のありさまを見給ふに、遙に十万億土の雲をわけて、光を千五百秋の月にかゞやかし給ける事、無極の悲願おもひしられて、不覺の涕淚おさへがたし。上人、いかに此身をはかなく見給らんといまさらはずかしくおぼえ給ければ、早名利の浮榮をすてゝ偏に無常菩提を求めむとぞ思されける。父の朝臣も去天徳四年正月の比ゆふべの煙とおなじく春の霞にかくれ給ぬ。いとゞ無常の虎も近づく心地して、雪山鳥明るを待べくもおぼえ給はざりければ、やがて川原のなかにて装束ぬきすてゝ、車にうちいれて、ともものどもにの給ふやう、我はこれより修行に出なむする也。おのれらはとく帰べし。我若浄土に往生せば、すみやかに娑婆にかへりて、有縁のものをみちびき、無縁のたぐひをすくふべし。菩薩は大悲あまねしといへども、縁あるをさきとす。我今此界にして菩提心を発す。此則有恩の地なり。又父母我生身を養ひ、師長我法身をはぐゝむ。檀那外に諸作し、僮僕内に給仕す。これらの力によりて今往生の大願を發し得たり。最初引接結縁者の契、ゆめ／＼たがふべからずとねんごろにの給ければ、あはれもことにふかく、あさましともいふばかりなくて、な／＼ぞかへりける。

8 さて内供たゞひとり摂津国の箕面寺といふ所へおはして、彼寺のかたはらに觀音院といふ所にぞすみ給へる。いま門八木の千手觀音と号するのはこれなり。応和二年仲春の比、彼所にして十種の大願ををこし往生極樂論といふ文をぞ作り給ひける。かの十種大願の頌に曰く、

一願我普搜「积尊教」 具覺「如来権実道」 念々遠「離諸塵勞」 現身必得「六根淨」

- 臨終身心得<sub>二</sub>安適<sub>一</sub> 往<sub>二</sub>生極樂上品蓮<sub>一</sub> 旋陀羅尼華三昧 同<sub>二</sub>彼南岳与<sub>二</sub>天台<sub>一</sub>
- <sub>二</sub>願我速還<sub>二</sub>娑婆界<sub>一</sub> 興<sub>二</sub>隆積尊遺法教<sub>一</sub> 遇<sub>レ</sub>彼慈尊<sub>二</sub>三会席<sub>一</sub> 最初得<sub>レ</sub>受<sub>二</sub>菩提記<sub>一</sub>
- 尽未来際興<sub>二</sub>教法<sub>一</sub> 乃至积尊在<sub>二</sub>々国<sub>一</sub> 能忍<sub>二</sub>三毒<sub>一</sub>度<sub>二</sub>衆生<sub>一</sub> 一同<sub>二</sub>积迦本弘誓<sub>一</sub>
- <sub>三</sub>願我值<sub>二</sub>遇<sub>二</sub>三世仏<sub>一</sub> 一々承仕無<sub>二</sub>空過<sub>一</sub> 忘<sub>レ</sub>時忘<sub>レ</sub>機妙弁才 問難如<sub>レ</sub>来決<sub>二</sub>衆疑<sub>一</sub>
- 隨<sub>レ</sub>仏常転<sub>二</sub>妙法輪<sub>一</sub> 広度<sub>二</sub>無量無辺衆<sub>一</sub> 能助<sub>レ</sub>彼仏大小化<sub>一</sub> 猶如<sub>二</sub>文殊及弥勒<sub>一</sub>
- <sub>四</sub>願我十方仏滅度 正像末法欲<sub>レ</sub>終時 再挑<sub>二</sub>如来正法炬<sub>一</sub> 令<sub>下</sub>繼<sub>二</sub>後仏<sub>一</sub> 不<sub>中</sub>斷滅<sub>上</sub>
- 恒為<sub>二</sub>衆生<sub>一</sub>擊<sub>二</sub>法鼓<sub>一</sub> 降<sub>レ</sub>魔制<sub>レ</sub>敵為<sub>二</sub>法雄<sub>一</sub> 求法興隆勇猛力 一如<sub>二</sub>法涌常啼等<sub>一</sub>
- <sub>五</sub>願我十方無仏国 開<sub>二</sub>仏教門<sub>一</sub>示<sub>二</sub>衆生<sub>一</sub> 截<sub>レ</sub>彼種々邪見棘 令<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>如来正見中<sub>一</sub>
- 常為<sub>レ</sub>法故捨<sub>二</sub>身命<sub>一</sub> 令<sub>二</sub>諸衆生知<sub>二</sub>法恩<sub>一</sub> 尋<sub>二</sub>彼善友求<sub>二</sub>正法<sub>一</sub> 欲<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>善財及雪山<sub>一</sub>
- <sub>六</sub>願我十方三災劫 大定知惠誓願力 能救<sub>二</sub>三災諸急難<sub>一</sub> 皆与<sub>二</sub>世出世間樂<sub>一</sub>
- 凡厥身心諸病患 一聞<sub>二</sub>名号<sub>一</sub>悉解脱 乃至十二殊勝願 等同<sub>二</sub>薬師本弘誓<sub>一</sub>
- <sub>七</sub>願我十方三惡道 代<sub>二</sub>諸衆生<sub>一</sub>受<sub>二</sub>衆苦<sub>一</sub> 以<sub>二</sub>我善根勝妙報<sub>一</sub> 悉皆施与<sub>二</sub>諸衆生<sub>一</sub>
- 拔<sub>二</sub>濟水火刀劍中<sub>一</sub> 忽坐<sub>二</sub>清涼蓮華座<sub>一</sub> 乃至大悲威神力 即同<sub>二</sub>觀音地藏尊<sub>一</sub>
- <sub>八</sub>願我無始生死來 見聞触知諸有情 怨親遠近結縁力 同生<sub>二</sub>我成仏国土<sub>一</sub>
- 或為<sub>二</sub>生身善知識<sub>一</sub> 或為<sub>二</sub>法門諸眷属<sub>一</sub> 乃至四十八大願 如<sub>二</sub>彼西方弥陀仏<sub>一</sub>
- <sub>九</sub>願我十方諸有情 發心修行諸善業 皆為<sub>二</sub>無縁不請友<sub>一</sub> 必加<sub>二</sub>威神<sub>一</sub>令<sub>二</sub>究竟<sub>一</sub>
- 雖<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>質碍諸魔軍<sub>一</sub> 則令<sub>二</sub>退散不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>便 速令<sub>レ</sub>具<sub>二</sub>足諸悉地<sub>一</sub> 等同<sub>二</sub>一字金輪尊<sub>一</sub>

十願我尽窮法界中 一切有情非情界 常居二処二不レ離身 大悲不レ捨常隨逐  
隨二彼無邊機差別二 普門示現能引導 皆坐二妙法心蓮臺二 同証二大日法界体二  
日景頻傾、年光空移、一生半過、遺命不レ幾。仏教難レ遇、人身希有。若空過二此生二者、定後二悔不レ可  
レ及。努力「云云」、庶勿レ失レ時。夫出家是前哲之跡、然人多不レ堪二隱遁二。亦古賢之風逐者猶少、至二  
于此發願二者、誰人不レ堪レ之故。

9 内供、箕面寺にすみ給けるも、なお心になはずやおぼえ給ひけむ。わがねがひもしとぐべくば、仏  
天我に有縁の地をあたへ給へと心中に祈念し給ひけるに、東山の奇秀にあたりて瑞雲の金色なるをみ  
る。これこそ祈請のしるしなれとて、応和三年の春の比、彼箕面をいで、雲の跡をたづぬるに播摩道  
の北の山のおくなりければ、よぢのぼりてみ給ふに、ひとつの小池あり。その水黄色に映澈してつね  
のいろにことなり、金色の瑞雲もこの池のかたはらよりぞたちたりける。池の東に一宇の伽藍あり。  
釈迦尊の形像を安置して、安満寺の稱謂をたつ。まことに人跡絶たるふるき寺にてぞありける。又此  
山の地形を見給ふに、西方遠くはれて日観のたよりをえ、南溟遥にのぞんで水想におもひを凝しつべ  
し。かた／＼観念のたよりを得たり。天我に地をあたへ、地我に時をあたふ。此をすて、いづちか  
さるべきとて、その池のかたはらに草菴をむすびてすみ給ひける。今池の坊となづくるはこのいおり  
の旧跡なり。

10 内供つら／＼この池の体を見給ふに、小池なりといへども水つねにたへたり。さだめてしりぬ、これ神龍のすむなるべし。実否をあらはさんがために、心をいたして祈請し給ひければ、一七日にあたりてかみかぶろなるわらは池のなかよりいで、水の上にたちたり。内供此童にのたまひけるは、汝がすがたを見るにまことのかたちにはあらず。我はこれ正直の教を学して真実の相をあらはす。わがためについてはれるすがたをしめすべからず、はやくまことのかたちをあらはさば、我またなむぢに帰すべしとの給ひて、猶祈禱をくわへ給ふに、二七日にあたりて、金色の神龍、池のなかよりいで、樹の上にある。内供龍に対しての給ふ様、汝龍畜たりといへども身すでに金色なり。思うところなきにあらず。さだめて仏法を愛し、衆生をあはれむ心あらんか。我此処に本尊を安置し仏法を興行せんともふ。はやく擁護の神となりて、来際永く退転せしむることなかれ。汝又我法味をうけばよろこぶ所にあらずや。神龍これを聞てかふべをたれ帰敬の気色ありて形をかくしおはりぬ。抑此寺の龍神は是大権の化現、利物の方便なるべし。其故は経中に若有禽獸金色身者必是菩薩と云て、けだものゝ身の色金色なるはこれぼさつなりといへり。しかのみならず、大地菩薩阿耨達池の龍となりて大雲の蔭を、して一切衆生におほふ。離苦の法門に自在をえてあまねく贍部州の衆生を利す。日夜に法水を流して常につくることなしといへり。龍州弘法大師の勧請には金色の形を神泉苑のうちに現し、千観内供の祈請には金色の姿を靈池の浪のうへにあらはす。こゝにしりぬ、池は是無熱惱池の流れ、龍は又善女龍王のたぐひなりといふことを。是によりて病痾にしづむものは、信をいたして池水をのめば疾患すなはちのぞけり。炎旱をうれふる時、誠をいたして法味を備れば、甘雨あらたにくだる。水面清

澄として、揚州百練の鏡のごとし、池門映徹して黄河千年の瑞にたり。天より一滴をくださねども  
瀑浪として岸をひたし、地より涓流をみちびかされども大淵海として峯をしづむ霖雨にも増せず、大  
早にも渴せず。神龍池にある時は水つねにかはかずといへる。うたがふべきにあらず。

### 金龍寺縁起中

1 内供神龍の奇瑞をあらはし給ひてのちは止住の僧侶よりはじめて万人その徳をあふがずといふことな  
し。ひとに善をすゝめ物の悪をとがめんがために、康保元年の比よりかたはらに一処の堂をたて、土  
木のいとなみをくはだて給へり。即普賢の尊像を安置して無始の罪霜をかなしみ給ふ。今普賢堂とい  
へるはこれなり。恒順衆生の誓門はまことにひろしといへども、三業六根の懺悔はなをこの所にして  
修しつべし。但此寺の最初は桓武天皇の御宇聖代延暦の比參議安倍是雄朝臣草創の本願主として堂舎  
十九宇を建立して、是を安満寺と号す。今の釈迦堂はこれの一なり。其後一百餘廻をへて金龍の瑞  
あらはれにし後は、内供本号をあらためて金龍寺とぞなづけ給ひける。又此堂の庭前に石の塔をたつ。  
これすなはずいうんの靈跡なり。

2 内供この普賢道場にして晝には南岳の懺文を誦して発露の涙をながし、暮には西方の行業を修して欣  
慕の心をぞすまし給ひける。仏を黄昏に念ずれば心寂たり、身を晝漏に観ずれば涙漣たりとかき

おき給へるはこれなり。今此寺の長日不断の例時懺法の行はこれ内供のはじめをき給へる勤なり。例時の後にはかならず懺悔の教主に対して、弥陀の名号をぞ唱へ給ひける。普賢の行願には専安養の往生をすゝめ給へるゆへにや。これまた内供のはじめおき給てよりの比、いまにたゆることなし。

3 凡忍辱の衣あつく慈悲の室ふかくして、たゞ人をぐゝみ、物をあはれむを心とぞし給ひける。或時洛陽のほとりの乞匄人等住所をわづらふことありけり。清水寺第十の別当叡源に寺家領の地一町をこひうけて乞匄人をぞおかれける。かゝりければ非人どもあつまりてよろこびおかむことかずもなかりける。城の内の最下の乞人をあはれむは、生身の如来を供養する功德よりもすぐれたりとて、或時には衣食をほどこし、癩瘡を療養し給ひける大慈大悲の御志、まことにゆへあるかな。即此地のうちに一宇の堂をたてゝ千手観音の像を安置して、非人等が本尊とぞし給ひける。今清水坂のかたゐが堂といへるはこれなり。清水寺より坂の非人を追却すること、ある時は濫觴をたづぬるに是千観内供の御あはれみなり。たやすくあらためらるべからずと公家武家の訴状に非人等が書は是なり。あやしの乞匄人にいたるまであはれみをかけ給こととも、賤もたふとみ仰がずといふことなし。

4 安和二年の比天下大に旱りして、万民此事をなげき、一人も是をうれへ給ふ。諸寺諸山の有智有行の僧侶におほせつけられて祈請し給けれども、天に片雲なく、地に一滯なかりければ、主上冷泉天皇勅使を千観内供の草菴につかはして雨沢滂沱の祈請をいたさるべきよし、ねむごろに仰ありけれども、

隱遁の身をもて論言応じがたきよし、かたく辞申されけり。勅史叡遍ことに懇懃なり、王事もろきことなし。其上無上菩提は報国をさきとす。かた／＼勅命のがれがたかるべきよし申されければ、内供勅使のみる前にて香をたき花を供し、手に香炉をとり口に神呪を誦して坐禅觀念し給ふ。すなはち禅念をいで、瓶水を天にそゞぎ給に、香煙雲となりて空中にみち灑水雨となりて天下にあまねし。六十餘州のうちに甘澍しば／＼くだりて、法雨うるほはずといふ所なし。其雨一日一夜やむことなかりけり。

5 勅使ぬれ／＼帰りまいりて事の次第を奏し申に主上叡感のあまりにさまぐの封賞を、こなはれけれども、現世の榮望は思ひすて、としひさしくまかりなりぬ。往生極樂欣求菩提の外さらにもてのぞみなしとて、かたくぞ辞退し給ける。昔善無畏三蔵の雨を祈し観音瓶水を出して国中に降す。今千観内供の雨をこふ、神龍瓶水を得て普天に灑ぐ。和漢ことなりといへども、効驗これおなじきものなり。

6 朝市に名をのがれて山雲に跡をかくし給てのちは、永く本寺公請の名譽をふりすて、故山止住の思をやめ給へりといへども、同法釈衆のすゝめによりて、安和三年「庚午」二月廿四日「丁酉」御年五十三にして叡山千手院の経蔵にして千光院の行譽律師を大阿闍利として伝法灌頂を稟受し給けり。讚衆廿四人儀式もことに嚴重なりければ、見聞の大衆もきほひおこりて随喜をいたし、梵釈龍天もさだめて驚覽とおぼえじ。

7 天祿の比三河権守源為憲がおとゝに微禪師といふものあり。内供のおこし給へる十願の文を写して為憲にあたふ。為憲これをみて褒讚のあまり六十韻の偈句を作りてぞ、内供の草庵につかはしける。

随喜千阿闍梨十大願結縁偈〔并序〕

源為憲

天台千観阿闍梨者、智証大師之門徒、相州府君之胤子也。蒞戒珠、瑩智鏡。雖昔弘法之輩、無以加之。時人以為緇門之棟梁也。天徳応和之際、志楽静処、退居於摂州箕面観音寺矣。当爾時、発十大願、載為一卷。有弟子為憲弟微禪師者焉。書一通相観之。其文云、願我普搜三釈尊教、具覚如来権美道。十大願〔云云〕。一々読誦、念々帰依。方今舎梨之証菩提、衆生之蒙引導、誰敢疑之者哉。今乃瞻部洲日本国々子学生源為憲、発一大願。々々、生君成仏之世界為一弟子、譬猶身子・目連之言於釈迦也。我尊靈山釈迦牟尼仏説云、仏種從縁起。又我大師大原白居易述懐云、願以今生世俗文字之業、狂言綺語之過、翻為将来世々讚仏乘之因、転法輪之縁。是故踰跪於仏・法・僧之前、以偈願曰、

帰命千闍梨 禅門之利器 早除有習業 先解無明酔

雲散五蘊結 焰消三毒熾 具足止与観 興隆頭与密

智恵照多劫 慈悲及群類 煩惱恒遠離 生死悉懺悔

利益界是九 哀愍生忽四 禅悦味不厭 糞掃衣所糞



行<sub>レ</sub>六波羅蜜<sub>一</sub> 先<sub>レ</sub>他而後<sub>レ</sub>自 入<sub>二</sub>四無量觀<sub>一</sub> 離<sub>レ</sub>欲而去<sub>レ</sub>嗜  
 能度<sub>二</sub>娑婆衆<sub>一</sub> 既作<sub>二</sub>如來使<sub>一</sub> 在<sub>レ</sub>昔求<sub>二</sub>寂靜<sub>一</sub> 住<sub>二</sub>于觀音寺<sub>一</sub>  
 寺僻山水深 人稀境幽邃 野鶴朝許<sub>レ</sub>交 峽猿夜隨<sub>レ</sub>淚  
 秋葉度<sub>レ</sub>林紅 春苔遶<sub>レ</sub>階翠 窓破雲空鎖 門寂月深悶  
 多有<sub>二</sub>空觀發<sub>一</sub> 終無<sub>二</sub>塵慮至<sub>一</sub> 坐禪亦經行 常行<sub>二</sub>頭陀事<sub>一</sub>  
 爾時發<sub>二</sub>十願<sub>一</sub> 堅<sub>二</sub>固菩提志<sub>一</sub> 從<sub>レ</sub>一至<sub>二</sub>于十<sub>一</sub> 心力普開示  
 願樂往<sub>二</sub>西方<sub>一</sub> 化<sub>二</sub>生蓮華<sub>一</sub>時 願樂還<sub>二</sub>娑婆<sub>一</sub> 興<sub>レ</sub>法任<sub>二</sub>心憲<sub>一</sub>  
 願樂遇<sub>二</sub>諸仏<sub>一</sub> 承<sub>二</sub>仕妙覺位<sub>一</sub> 願樂教法修 再令<sub>二</sub>正法致<sub>一</sub>  
 願樂求<sub>二</sub>正法<sub>一</sub> 不<sub>レ</sub>与<sub>二</sub>雪山<sub>一</sub>異<sub>上</sub> 願樂三災劫 救<sub>レ</sub>難將服食  
 願樂代<sub>二</sub>衆生<sub>一</sub> 受<sub>レ</sub>苦到<sub>二</sub>阿鼻<sub>一</sub> 願樂見聞衆 引<sub>二</sub>導不退地<sub>一</sub>  
 願樂諸有情 悉退<sub>二</sub>魔軍率<sub>一</sub> 願樂情非情 在<sub>二</sub>々処々利  
 願海一々大 我今稽首視 視了競<sub>二</sub>結縁<sub>一</sub> 一生過<sub>レ</sub>隙駒  
 弥陀四十八 藥師一十二 前身發<sub>二</sub>彼願<sub>一</sub> 成道乃得<sub>レ</sub>遂  
 今日君十種 当來猶可<sub>レ</sub>比 昔有<sub>二</sub>結縁<sub>一</sub>者 他生十号備  
 隨<sub>二</sub>悉達太子<sub>一</sub> 蒙<sub>レ</sub>化最初恣 罵<sub>二</sub>不輕菩薩<sub>一</sub> 得益猶未<sub>レ</sub>墜  
 況合<sub>二</sub>帰依掌<sub>一</sub> 況發<sub>二</sub>隨喜意<sub>一</sub> 從<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>十願<sub>一</sub>來 誦<sub>二</sub>之於寤寐<sub>一</sub>  
 我被<sub>二</sub>愛見牽<sub>一</sub> 火宅作<sub>二</sub>幼稚<sub>一</sub> 駢<sub>レ</sub>鷄坐<sub>二</sub>書堂<sub>一</sub> 惱<sub>レ</sub>螢照<sub>二</sub>經笥<sub>一</sub>

報差是桂枝 負<sub>レ</sub>笈老<sub>二</sub>洙泗<sub>一</sub> 憂悲無<sub>二</sub>間斷<sub>一</sub> 昔別<sub>二</sub>敵君吏<sub>一</sub>  
殺生在<sub>二</sub>孝道<sub>一</sub> 扣<sub>レ</sub>氷窺<sub>二</sub>魚萃<sub>一</sub> 愚痴不<sub>二</sub>退散<sub>一</sub> 去年龍門躡  
六根之所作 罪障徒鱗次 適遇<sub>二</sub>善知識<sub>一</sub> 仏種自將<sub>レ</sub>暨  
帰<sub>二</sub>此願王<sub>一</sub>故 心地善根殖 帰<sub>二</sub>此願王<sub>一</sub>故 性仏善苗蒔  
君得<sub>二</sub>菩提<sub>一</sub>時 唯願勿<sub>二</sub>棄置<sub>一</sub> 君得<sub>二</sub>菩提<sub>一</sub>時 唯願常從侍  
我為<sub>二</sub>一弟子<sub>一</sub> 永有<sub>二</sub>親近思<sub>一</sub> 而助<sub>二</sub>其仏化<sub>一</sub> 惡業悉対治  
生々亦世々 随<sub>レ</sub>君得<sub>二</sub>受記<sub>一</sub> 必入<sub>二</sub>薩婆若<sub>一</sub> 成仏作<sub>二</sub>後嗣<sub>一</sub>  
一心作<sub>二</sub>此偈<sub>一</sub> 通計六百字 以為<sub>二</sub>出世縁<sub>一</sub> 決定与<sub>レ</sub>君值  
書<sub>レ</sub>之白<sub>レ</sub>仏言 坐臥不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>棄 朝誦復暮誦 命終手中拏  
内供此偈什を得て値遇の志を感じ誓願の趣を見給ふに、感涙をさへがたかりければ、四韻の詩をぞ報じ給ける。其詞云、

余昔有<sub>レ</sub>時発<sub>二</sub>十種願<sub>一</sub>、為<sub>レ</sub>恋<sub>二</sub>古賢之旧蹤<sub>一</sub>、為<sub>レ</sub>救<sub>二</sub>至愚之新罪<sub>一</sub>者也。爰澄澄才子抽<sub>二</sub>希代之心<sub>一</sub>而発<sub>レ</sub>誓、振<sub>二</sub>命世之名<sub>一</sub>而飛<sub>レ</sub>文、褒讚之詞只在<sub>二</sub>余之十願<sub>一</sub>、親近之志遠期<sub>二</sub>余之多生<sub>一</sub>。見<sub>二</sub>其文章<sub>一</sub>則陶<sub>レ</sub>潜之体在<sub>レ</sub>眼、観<sub>二</sub>其義理<sub>一</sub>則摩詰之談徹<sub>レ</sub>肝、不堪<sub>二</sub>感吟<sub>一</sub>、聊呈<sub>二</sub>蕪詞<sub>一</sub>。云<sub>レ</sub>爾。

沙門积千観

讚文一卷漸沈吟 玉韻鏗鏘直可<sub>レ</sub>金 句々断<sub>レ</sub>腸神不<sub>レ</sub>静 行々催<sub>レ</sub>感涙無<sub>レ</sub>禁  
菩提道遠艱難思 生死海深老少心 君若出<sub>レ</sub>塵完<sub>二</sub>此誓<sub>一</sub> 定聞<sub>二</sub>西界世雄音<sub>一</sub>

彼源澄才子は、若して文の道に遊て一枝の桂を折、走て法の門に入て九品の蓮を願ければ、ことに喜悅の思をなして、かさねてこれを和す。其詞云、

天禄二年秋、為憲著「随喜十願之偈」、分作二本。一本奉三千闍梨、一本自持「手中」。闍梨愍我故納「受此偈」、即作「結縁詩句」、価直三百千両金、而以与之。弟子一見生「歡喜之心」、二見動「感歎之心」、三見知「因果之心」。僕優息不「過塵区火宅之中」、談話不「過愚痴遊戲之客」。常歎遂「生於草露」、遺「悔於宝山」。適作「十誓願之讚歎」、遥為「三菩提之因縁」。寔得「善知識」也。幸甚と。今立「愚昧之志」、亦呈「禪座」者、於「意」云何。我有「本願」。々生「君成仏之世界」為「一弟」、譬猶「身子・目連言」於「釈迦」也。一念不退、三宝心「知」。欲「重宣」此義「而繼」韻作「之」。云爾。

学生源為憲

慈悲佳句任「恣吟」一繼孫家擲地金 帰「願」化城「蹤」遠過 結「縁」朽宅「戲」先禁  
君終他界明行足 我亦此生初發心 看「取」大師甚深誓「一」 娑婆再似「遇」觀音「一」

8 内供三有の昇沈もおぼつかなく、九品の往生いかごとやおぼえ給けむ。山崎の橋下へおはして橋うらをとひ給けるに、あやしこのわらはの牛に乗てかみにはねかつらといふ物をしたりけるが、こゑをあげてうたひけるは、十悪五逆謗方等極重最下の罪人も一たび南無と唱れば引接さだめてうたがはずといひてかきつけやうにうせにけり。あやしむべし。権化のしめし給けるにや。内供これを聞給て信心いよ／＼ふかくして、なく／＼帰給て後かのわらはのいひけることばのうへに和哥をぞ詠じそへ給け

る。

おそろしや 十悪五逆 謗方等 ほどなき身にも つもるつみかな  
弥陀の名は 極重最下の 罪人も 十たびとなへて にしへゆくなり  
すさびにも 一たび南無と 唱れば かならずにしへ ゆくぞうれしき  
たのもしや 引接定て うたがはず みせ給へかし 西のすみかを

9 抑山崎の橋は天平年中に行基菩薩建立の、ち勅命ありて、たび／＼これをわたさるといへども河水森漫して今の世には一柱なし。橋本の宿といへる。その名わづかのこれり。かの源信僧都は坂本の巫女にとひてたもとをしほり、この千観内供は山崎の橋占にきゝてなみだをながし給ふ。二聖ともに往生のみちくらかるべきにあらずといへども、たゞこれ切なるこゝろざしのいたれることをあらはさむとにや。

10 世をのがれ給しよりのち、徳をかくす思ひふかかりければ、淀の渡のほとりにすみかをしめて、馬かしといふことをぞし給ける。いま千観垣内といひつたへたるはこれなり。求道の志によりて名利の羅縞をきるには、徳を縮め疵を露はし狂を揚げ実を隠すよりもすぎたるはなし。漢朝の恵叡の羊を牽、南都の玄賓の馬を飼、みなこの心なるべし。しかあるのみならず、彼あふさかのせきの嶮きに車を引て喘ぐ牛、よどのわたりの遙に重を負て苦む駒、かれをきゝ、これを見るに、みなこれ厭離の心をも

よをすたよりならずといふことなし。牛馬の險路に往還して苦む姿をみるに我等が悪道に輪廻して、うれへにしづむにことならず。むかし、もろこしに人ありき。秋の夜のながきに疲馬の愁る声を聞てすなはち家をいづ。我朝に俗ありき。夏の日のおそきに微牛のくるしむすがたをみてたちまちに心を発す。かたじけなく龍象の形をやつして、いやしくも牛馬のたぐひにちかづき給こと、縁を結て物を利し、徳をかくして塵にまじはるふかきこゝろはかりがたし。

### 金龍寺縁起下

1 淀のわたりにしては利物結縁のために馬かしなどをし給けれども、当寺の草菴に帰ては常に日想觀をぞ凝し給ける。極樂をねがふこともひとへに利生のためなりとて四弘誓願の心を和哥に詠じてぞしるしをかれける。

#### 衆生無辺誓願度

いり日さす かたへぞいそぐ おもへども われもうみにて いかゞすくはむ

#### 煩惱無辺誓願斷

むかしより こゝろのくまに いるちりを たてゝぞきよき 風にまかする

#### 法門無尽誓願知

つきもせぬ のりのあめには みなぬれむ ほとけのたねを あらはさむまで

無上菩提誓願証

やまのはに かくれし月を もとめても 我身のためと おもふものは

2 又八箇のいましめをしるして末代をすゝめ、極樂の和讃をつくりて人に縁をむすばしめ給ければ、道俗貴賤あまねく此讃をさへづり、弥陀の名号をぞ唱ける。しかのみならず、此和讃を第二第三の句にきて数篇の詞什を詠じ哥のをはりごとには、念仏一遍をかきそへ給ける。極樂の和讃并八箇の起請にいはく、

八箇条起請

- 一、自<sub>レ</sub>病患<sub>ニ</sub>之外、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>欠<sub>ニ</sub>例時勤<sub>一</sub>
  - 一、念誦<sub>レ</sub>読経之中間、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>交<sub>ニ</sub>世俗言論<sub>一</sub>
  - 一、常守<sub>ニ</sub>身・口・意<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>談<sub>ニ</sub>他好悪長短<sub>一</sub>
  - 一、於<sub>ニ</sub>無益言論<sub>一</sub>、縦雖<sub>レ</sub>得<sub>ニ</sub>其理<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>諍論<sub>一</sub>
  - 一、於<sub>ニ</sub>親友同行<sub>一</sub>、一事以上、不<sub>ニ</sub>内外隔<sub>一</sub>
  - 一、往生極樂之外、永可<sub>レ</sub>絶<sub>ニ</sub>世俗悵望<sub>一</sub>
  - 一、於<sub>ニ</sub>修学事<sub>一</sub>、雖<sub>レ</sub>非<sub>ニ</sub>其器<sub>一</sub>、致<sub>ニ</sub>慇懃<sub>一</sub>必成就
  - 一、繫<sub>ニ</sub>心於如来禁戒<sub>一</sub>、常愧<sub>ニ</sub>我罪業<sub>一</sub>
- 若違<sub>ニ</sub>此八事<sub>一</sub>、当<sub>レ</sub>知地獄人、若順<sub>ニ</sub>此八事<sub>一</sub>、当<sub>レ</sub>知浄土人。

寅卯〔修行觀法〕 辰巳〔転読文書〕

午未〔徒衆同学〕 申酉〔文義暗誦〕

戌亥〔問師要決〕 子丑〔休息全身〕

右、子臥寅起餘不眠、止無益語及往還。若修若学捨懈倦、寸陰寸時勿徒然。制禁意馬常加鞭、釣得心魚莫放筌。繫念往生極樂蓮、遂此身靡惑障牽。念仏黄昏心寂々、觀身晝漏涙漣々。骸在於閻浮蓬下、神愁於閻魔庁前。若有接念山林之聖者、採菓拾薪供給所須。若有建立堂塔之輩者、伐杣下筏造畢作事。煩惱家狗打而不去、菩提野鹿繫而難馴。随世似有可望、背俗如狂人。不寧世間哉、何処隱一身。信心是深、豈隔極樂上品之蓮、善根無量、定期弥勒下生之暁。以八事誠徒衆、發十願導群生矣。

極樂之和讚

ゆかばやな娑婆の界の西の方　よろづの人のねがふごとくらく  
まよはしな十億の国すぎて　いたるところはみだのごくらく  
もとめつる浄土はありつ極樂界　われらがつるのすみかなりけり  
ごとくらくに仏はいます弥陀尊　人をむかふるちかひたがふな  
なみだでる七重宝樹影清く　みゆるはみだの浄土なりけり  
ごとくらくは八功德水池澄て　かけみるほどになりける哉  
いけみづは苦空無我の浪唱へ　きく人はみなこゝろすむ覽

ごくらくは常楽我浄の風吹て ちりばかりなるつみもとどめず  
あつまりて天の音楽雲にうつ つゞみのこゑのめでたかるらむ  
ごくらくは金の沙地に敷て あゆむたびにぞほとけをばみる  
ねがふひと昼夜六時に迎へつゝ わたすときけばわれもたのもし  
くもまより宝の蓮雨降て はなたてまつるあみだほとけよ  
のりをこそ孔雀鸚鵡の声とに さへづるらめなゆきてきかばや  
とりさへに妙法門を唱れば きくにあくべきことの葉ぞなき  
ごくらくは衆生聞ものをのづから ねがふころのゆきぬべきかな  
ゆく人は仏法僧を念ずなり ともなふばかりいそぎむまれん  
てらすらむ仏の光きはもなく くらきぢごくのそこもあらはに  
としふれどひとりの寿はかりなし あなうらやまし我もさらばや  
いにしへの誓は四十八大願 ひとつたがふなふかくたのむぞ  
みだほとけ心一子の大慈悲は きくにつけてもたのもしき哉  
おそろしや十悪五逆謗方等 ほどなきみにもつおる罪哉  
みだの名は極重最下の罪人も とたびとなへて西へゆくなり  
すさみにも一たび南無と唱れば かならずにしへゆくぞうれしき  
たのもしや引接定てうたがはず みを給べしにしのすみかを



かずしらず浄土十方多けれど つねに心はにしへこそゆけ  
うたがはず極楽我等縁深し つみありなしもわけすみらひけ  
かずしらず仏は三世にましませど みだをぞたのむかへすくも  
むかしより弥陀は我等に契あり むかへむことはこのたびぞかし  
おもひいでゝ二日二日の真心に 西をぞねがふみなをとなへて  
かずしらず弥陀の御名を唱れば のこれるつみはあらじとぞ思ふ  
たのもしや大悲の誓あやまたず またみぬ人のしるべしたまへ  
しな／＼に九品蓮臺定まれり とおもへば今はたのもしき哉  
むかしよりうまれうまるゝ人は みな西にむかひてなをやとなへし  
ことはりや菩提不退の菩薩衆 むまるばかりの心はへには  
いれたまへ一生補処のその中に しやかのみりにあへるかひには  
いくばくと算数もかぞへしりがたし むまるゝ人のはかりなければ  
をそりなく我等が此身たのしまむ みだのはぐゝむはねにかくれて  
ごくらくの弥陀の誓にすくはれて もるべき人もあらじとぞ思ふ  
うれしとき来世は蓮のうへにして みだのみりをきかむと思へば  
ゆきあひて此身は聖を友とすら おもふ心のいとまなきかな  
おもひやれ人身ふたゝびうけがたし いそげやいそげごくらくのみち

めづらしや仏教あふことまれなるに かたきみのりをわくぞうれしき  
世にあらむ皆人心ひとつにて やすくたのしき国をもとめに

ごくらくの弥陀にはつかへたてまつれ かたじけなくもむかへ給ふに  
のぞみつる印の位春の夢 かけてもきかじおろかなりけり

もとめつるたのしみさかへ水の泡 おどろく程にみなきえにけり

なげきつゝはしりもとめてなすほどに つみかさなれるみとぞ成ぬる  
いかにせむ我身三途におちぬべし とのみおぼえて年をふる哉

いでがたき三途にいりと入ぬれば ごうをそふなるいそぎゆかしと  
おちぬれば無量劫にも出がたし とはしりながら入ぬべきかな

まれにしてたま／＼人の身を受けて かなはぬ千代のいのりをぞする  
はかなしや栄華の望又深し つゆのいのちとかづはしる／＼

しらはやなおよそ輪廻のきはなきは いかなるつみのむくひなるらん  
おもはしよ此事ひとつによりてなり たゞ世をすてゝみだをたのまん

ごくらくの弥陀の誓のなかりせば うかぶ世もなき身とぞならまし  
つみおもき我等はうかぶ時なけん みだのちかひのふねにのらずは

おなじくは釈迦牟尼仏此由を ときけむ時にあへるこの身の  
しやかほとけ説をき給はず成ならば いつかはかゝるのりをきかまし

いたづらにおほくの生死過しきて かひなきみこそあはれなりけれ  
いとなく長夜の闇に迷ひなん みだのちかひをたのまざりせば  
たのむそよ帰命頂礼釈迦尊 われらをすてぬちかひとぞきく  
しやかほとけ五濁悪世の能化の主 うろのさかひをとくいでなばや  
このたびは大悲我等をすてずして 西のすみかへいそぎいでわせ  
しやかほとけ三途のくるしみぬきたまふ たつるちかひはなにかうたがふ  
あなかしこ帰命頂礼弥陀尊 このたびいそぎむかへ給へよ  
わがたのむ極楽界会の能化の主 きたりむかふるちかひたがふな  
つくりたるたとひ罪業おもくとも たのむぞほとけかるめたまへよ  
みだほとけ引接かならず垂給へ こりともこりぬ今はこちこし

3 凡天慶以前には我朝に弥陀の名号を唱ることまれなりけり。空也聖人、千観内供のすゝめよりして弥陀念仏といふことはひろまれるなり。十願の文の中にも、牟尼之日既隠、慈尊之月未照、毒氣深入、構篩之菓難服、本心既失、妄見之綱弥纏。不如下乘<sub>レ</sub>弥陀願力<sub>一</sub>、期中九品之其一<sub>一</sub>とぞすゝめ給へる。

4 内供往生の行業のひま／＼には天台宗の大事義科ともにつきて私記をぞ多つくりあつめられける。其等天台・法相・三論三の宗の釈をあつめ書て三宗相对抄・三宗要録などなづけられたり。かやうの文

どもを袂といふ物に入れて牛におふせて千手院へおはしたりければ、昔の同法あつまりてまつらしみかたらふほどに、人をよびて物をとりよせらるゝを見れば、袂といふ物なりけり。さりぬべき中の土産なめりとみるに、ひらきいだされたるものさまぐの巻物双紙なりければ、人思にたがひてあはれなりなどこれにしも入給へるそと問たてまつれば、ぬらさじとてとばかりぞこたへ給ける。人とこの文をよろこびたふたみあへる事かぎりなし。いまの世に山門寺門の大堂の堅義にも金龍寺の先徳の積義とて問人も答人もいだすは即これなり。

5 或時雲山に雪深してよものこず多もみえわかず、陰谷に氷結てかけひの水もおとたえたりければ、山さびしく人稀にしてかくぞ詠じ給ける。

たまさかにみるだにさびしよのつねの ゆきのみやまを思ひこそすれ  
つねに哥などをもよみ給けり。

法身の月はわがみを照せども 無明の雲のみせぬなりけり  
といふ詠哥は勅撰の中にも入れるとかや。

6 行業漸くつもりて、往生時いたるべきしるしにや、或時、夢のうちに金色の人西方より来て、内供に告ての給はく、信心是ふかし、あに極楽上品の蓮をへだてむや、善根はかりなし、定弥勒下生の暁を期せむとぞしめされける。最後終焉の時は日来のねがひ一もたがふことなし。手に願文をにぎり、口

に仏号を唱へ給ふ。異香室にみち、雨花眼にさいぎる。聖衆の音楽は彩雲の上に奏し、観音の蓮臺は草菴の前にのぞめり。夕陽西に傾く、眼十萬億刹の夕の空にかゞやき、白毫右に遶る、心上品上生の夜の月をかけたなり。于時円融院の御宇永観元年「癸未」大呂十三日、御年六十六にしておはり給ぬ。智西むねにみつ、賢哲も閃電の光とゞまることなく、痴愛心つたなき我等石火の景いくばくの程に、寺院の僧侶よりはじめて村里の道俗にいたるまで、終焉をたとみ、離憂をかなしむこと双林の滅度におなじ。

7 緇素別をかなしみて涙川におぼれ、男女徳をしたひて悲火にこがるといへども、終に荼毗時至て、遺骨を墳墓におさめたてまつる。何ぞたゞ救世観音の餘光を磯長の月に留給へるのみならむや、かたじけなく千手千眼の芳骨を金龍の雲にかくし給へり。春の霞秋の霧なを紫雲の瑞をのこし、柴のいほり苔の庭みな聖衆のあとにあらざといふことなし。爰に義観上人といふ人或時夢の中に天童かの靈廟に來下して、箒をもちて庭をはらひ、香炉をとりて行道すとみたまひけり。まさにしるや、この地は是神龍の窟宅するのみにあらず、仏天の依止する所也といふことを誰かまことをいたしてあゆみをはこばざらむや。内供平生時、権中納言敦忠卿の第一の女子師檀のあひだにてぞおはしける。然間、女子契約してのたまはく、終焉のゝち、かならず生所をしめし給へと。こゝに内供入滅の後、いくばくのほどをへずして、彼女子の夢中に蓮華の船にのりておはしければ、生所はいづれの所にておはしますぞと問たてまつり給ければ、娑婆界の西の方、十萬億の国すぎて浄土を極樂界といふ。仏まします、

弥陀尊と答て、昔つくりたまふところの極楽の和讃を誦して西方をさしてさり給ひにけり。

8 当寺は是、神龍池水に現して奇瑞を顕し、権化芳骨を留て往生を示す聖跡也。これによりて五代の上皇尊崇の寺なれば、鎮に天下の泰平を禱る、四代の將軍優賞の地なり、弥関東の静謐を仰ぐ。しかのみならず、中比清澄寺の沙門尊恵といふもの、法華読誦の請によりて白牛の車に駕して炎王の序にいたることありけり。時に炎魔大王尊恵にしめしての給はく、摂州の内に往生の靈地五所あり。いま金龍寺はこれ其一也といへり。既に佳名を日域の間にあらはずのみにあらず、遙に寺号を息諍の城にとむ。こゝに知ぬ、あゆみをはこび棲をしむる人苦界をいとひ、楽邦に生べしといふことを。かの西天に一の国あり、いたるもの道心おこす、上界に一の天あり、生ものひかめるおもひをなす。并州の人は必弥陀を念じて安養にゆき、無想の天は定て涅槃を誘して捺落におつ。蘭芷の室に入、鮑魚の肆にすむもの、所により棲に隨てよしあしもことなるべし。しかる間、官禄に名をのがれて、幽閑に跡をかくす人多く金龍の瑞雲に思をかけて、西土の蓮臺におほりをとる。これ即大権のかまへむなしからず、利物のちかひあやまることなきがゆへならし。

9 方今、先徳の一期を彩画して、後代の四衆にのこしとむる事、ひとへに朝野遠近あまねくたのみを十願の文にかけて、緇素貴賤ことごとく志を千觀の跡にはこばしめむがためなり。仏種は縁よりおこり、諸業は心より生ず。信をいたさむ人は聖意にかなひ、縁をむすばんものは利益にもれんや。願は

丹青に徳をあらはすをもて西刹に値遇したてまつらむとおもふ。

元禄十三年秋七月九日以金龍寺藏本謄写

山門横川兜率谷鶏頭院藏